





ストラトフォード・アポン・エイヴォン tratford upon Avon

ハーフティンバーの民家

緑の丘陵地をゆったりと流れるエイヴォン川。ストラトフォード・アポン・エイヴォンは、 その名のとおり、エイヴォン川河畔に位置する小さなまちだ。 シェイクスピアのゆかりの地として、また牧歌的な田園風景が広がる地方として、 多くの人々を魅了してきたストラトフォード。そこには、中世から近世にかけてつくられた、 ハーフティンバーと呼ばれる木造の民家が、美しい幾何学模様を描いて建ち並んでいる。

CONTENTS

世界の建築文化を訪ねて ⑥ ストラトフォード・アポン・エイヴォン ハーフティンバーの民家

ストラトフォード・アボン・エイヴォン ミュージアム・ガイド

ストラトフォード・アポン・エイヴォンの 都市と建築を知るキーワード

AP com-AREA STUDY 販売店のあるまち ⑥ 北海道·带広市 株式会社 道東サッシセンター

ARCHITECTURE VIEW UP ニューピア竹芝レストランコート /連弧の家

21

グッドリビングショー'93/河内アル ミニウム工業株式会社社名変更/ ビル用総合カタログ '93-'94刊行/ YKKオリジナルカレンダー

25



前頁:市内を流れるエイヴォン川

写真:普後均 文:編集部

14 15 17 制作協力…株式会社1&S 株式会社アルシーヴ社 AD…伊丹友広 デザイン・レイアウト…イットイズデザイン 表紙イラストレーション…冨沢天



alf Timber

木組の幾何学

柱や梁を、そのまま外部に見せたハーフティンバー様式の 木造建築。黒い木組と白い漆喰壁との対比がつくりだす ざまざまな幾何学模様は、中世の職人の手仕事とは 思えないほど、精巧かつ斬新だ。微妙に曲がった木組にも、 手づくりの造形がもつぬくもりが感じられる。







されば、われ今なお牧場、森、山々を愛し/ 緑濃き大地に見ゆる凡てのものを愛し/眼と 耳にうつる偉大なる世界のあらゆるもの/眼 と耳とが半ば創造し、認知するものを愛する

ワーズワースの詩がふと頭をよぎる。ロンド ンからストラトフォード・アポン・エイヴォン へと向かう単線のローカル鉄道。車窓から見 える風景は、イギリスが生んだ偉大な自然詩 人、ワーズワースの世界そのものであった。 地平線にゆるやかな弧を描く丘の連なり、緑 の牧草、静かに流れる小川。時たま現われる 林や森、色とりどりの花壇に囲まれた農家…。 はてしなく続く、おおらかで牧歌的な田園風 景は、ため息が出るほどに美しい。そして、ワ ーズワースが生きた200年前と、まったく変 わらぬ風景がそこにあるという驚き…。

ロンドンから列車で約2時間半。ストラトフ ォード・アポン・エイヴォン(なんという長っ たらしい名前。イギリスにはストラトフォー ドという地名があちこちにあるせいだ。以下、 本文ではストラトフォードと記す)に降り立 ったときには、降ったりやんだりというイギ リス特有の霧雨に包まれて、まち並みは煙っ

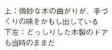
シェイクスピアが生まれ、また晩年を過ごし

たことでも知られるこのまちは、現在もロイ ヤル・シェイクスピア・シアターの本拠地とな っていて、本場でシェイクスピア劇を楽しも うという観光客で年中賑わっている。とはい っても喧騒とはほど遠く、そぞろ歩く人々の 話し声も霧雨に吸いこまれたかのようにひっ そりとしている。美しいまち並みでは、人は 寡黙になるのだろうか。

メインストリートには16~17世紀につくられ たハーフティンバーの建物が建ち並ぶ。素朴 な木組がつくりだすモノトーンのまち並みと、 軒先に飾られた色鮮やかなフラワーポットが、 ハッとするほど美しい調和を見せている。

ハーフティンバーというのは、中世末から近 世にかけて、イギリスを中心にフランス北部、 中部ドイツに普及した木造建築の様式であ る。外部に露出した木組のデザインもさまざ まで、テューダー朝時代の垂直を強調したフ レームもあれば、エリザベス朝時代の筋かい に曲木を使った装飾的なものもある。当時の イギリスには大工仕事に三つの流派があり、流 派によってフレームの間隔や形に独自のスタ イルがあったという。

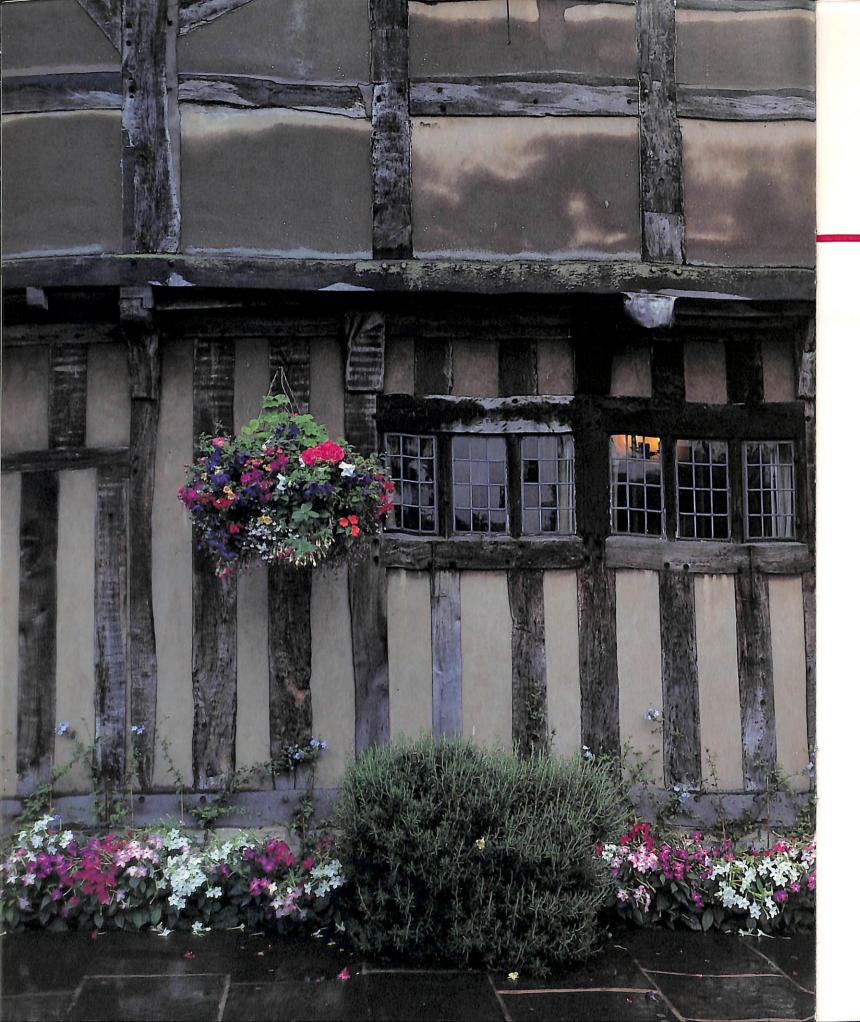
樫の木組と漆喰の壁がつくりだす黒白の幾何 学模様。それはユークリッドの図形のようで もあり、補修によって微妙に色調が異なった 壁面はモンドリアンの抽象画のようでもある。



下右:茅葺きに煙突のある典型 的な中世の民家。アン・ハサウェ

次頁:ストラトフォードの住字 の花壇には、いつも色とりどり の花が咲きみだれている。 ホールズ・クロフト







1~9:木組のさまざまなバリエーション 10:モンドリアンの抽象画のような壁面。 コッツウォルズで 前頁:垂直線を強調したテューダー朝様式の ハーフティンバー。ホールズ・クロフト

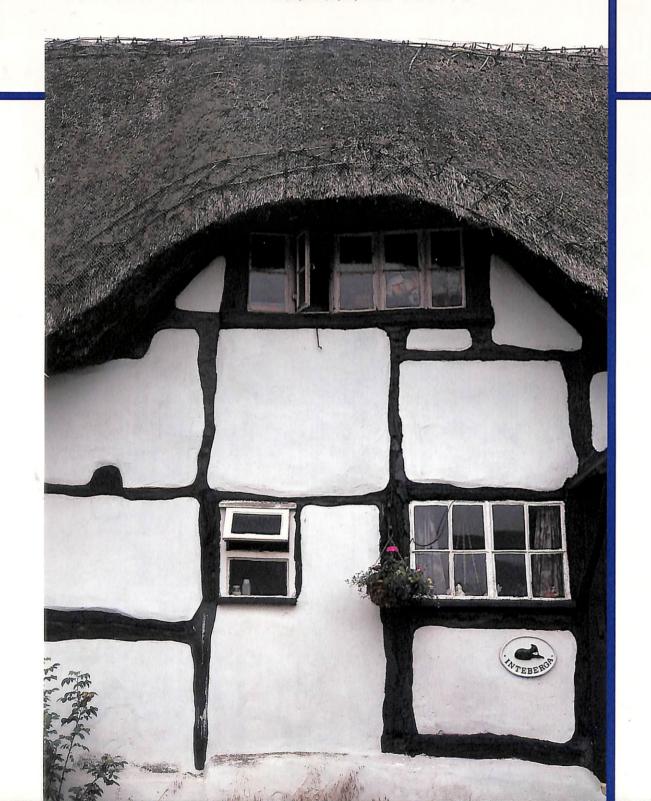
alf Timber



ormer Window

切妻と屋根窓

ハーフティンバー、急な勾配のゲーブル(切妻屋根)、暖炉の煙突、屋根裏部屋につけられた 小さなドーマーウィンドウ・・イギリスの民家の特徴を挙げるとすれば、この4つになるだろう。 なかでも切妻屋根とドーマーウィンドウは、近代以降の住宅建築に繰り返し引用され、 "古きよきイギリスの田園住宅"の記号的役割をはたすことにもなるのだ。





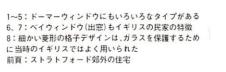
















ストラトフォード周辺の民家を撮影するために、レンタカーを走らせる。牧草地や麦畑がえんえんと続く中に、忽然と現われる小さな集落。ひっそりと肩を寄せあった住宅は、まるでお伽話の世界にでも出てきそうな、可愛らしい素朴なつくりだ。そして、申し合わせたように、どの家にも小さなドーマーウィンドウ(屋根窓)がついている。無駄な装飾のないシンプルな外観に、このドーマーウィンドウがアクセントを与えているのだ。

ドーマーウィンドウの出現は、住宅の形態の変化と深く関係している。中世の時代、住宅は1階の居間が屋根まで開け放たれているオープンホールが一般的であった(このオープンホールはそのまたはるか以前、いろりがあった頃からのものである)。やがてオープンホールに面して壁のない小さな中2階スペースが収納用につくられ、徐々に軒を上げてそれが屋根裏部屋となり、採光用のこの小窓が設けられることになるのである。

15~16世紀に登場したこのドーマーウィンドウは、切妻や煙突とともに、イギリスの住宅建築に繰り返し引用されることになる。近代イギリスの偉大な建築家、リチャード・ノーマン・ショウも、ジョン・ナッシュも、こうした民家の要素を積極的に引用、再構成して次々と住宅を設計していった。

屋根窓や切妻は、古きよき伝統へのノスタル ジーをかきたてる格好のエレメントであり、人 々もまたそうしたイメージを付加した住宅を 望んだからでもある。なぜなら、美しい田園 での暮らしは、イギリスの人々にとって、憧 憬してやまないものであったからだ。





コッツウォルズの田園生活

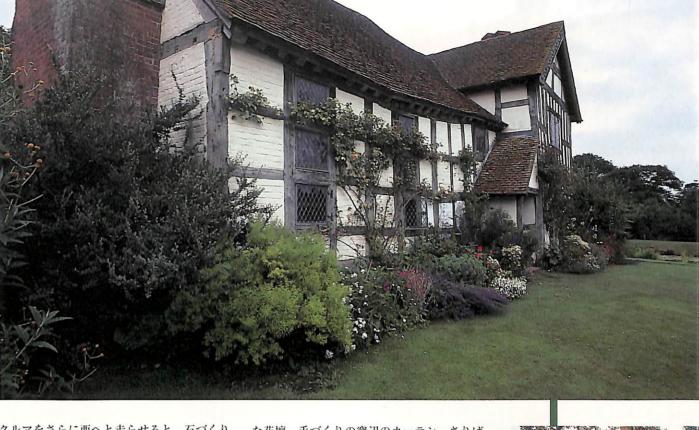
ストラトフォードの西部に広がるコッツウォルズ地方は、 中世・近世の民家の宝庫とでもいうべき一帯である。 すばらしい田園風景の中に点在する素朴な民家や荘園領主の邸宅。 イギリスの人々が愛してやまない田園生活のよきモデルが、 ここにはまだたくさん残されている。







ナーハウスの全景 左:2階がせり出した桁出し構法 右:屋根の構造



クルマをさらに西へと走らせると、石づくり の民家が目立ちはじめる。Cotswolds Hills (コッツウォルズ丘陵、あるいはコッツウォ ルズ地方)の中心へと近づいてきたのだ。グ ロースター州を中心に5つの州にまたがる約 800マイル四方の広大なコッツウォルズ・ヒル ズ。ストラトフォードはその東端に位置し、 南は温泉保養地として知られるバースにまで ナーハウス(荘園領主の家)も点在している。

ここはかつてコッツウォルズ・ストーンと呼ば れる建築用石材の産出地として栄えていた。 それでこの近辺には石造の民家が多いのだ。 石づくりの民家とはいっても、その色調はや わらかく温かだ。ゴールデンブラウンから淡 いグレーまで、微妙な色の階調を見せる石壁 が、簡潔なスタイルの民家を、ほのぼのとし た愛着のあるものにしている。

く、味わいのある民家。碑文に刻まれた年度 から、いずれも100~300年の年月を経たもの ばかりである。それでも決して荒廃や老朽の 色を漂わせていないのは、きちんと補修され ていること、そして何よりも住む人の愛情が きめ細やかに行き届いて、一軒の家を優しく 包みこんでいるからだろう。よく手入れされ

た花壇、手づくりの窓辺のカーテン、さりげ なく置かれた鉢植え…。田園風景にとけこん だ、いや、風景そのものの中から生まれてき たような、やわらかな空間がここには息づい ている。

ここコッツウォルズには、民家ばかりではな く、貴族の伝統的な田園生活を彷彿させるマ そのひとつが、ブロックハンプトンにあるマ ナーハウスだ。

かつて貴族は、1年の半分を領地にある邸宅 で過ごし、残り半分をロンドンのタウンハウ スを根城に、宮廷の社交生活を楽しむのが通 例であった。領地にいる秋から冬のあいだ、貴 族たちは広大な田園の中で狩猟や乗馬、ゴル フ、テニスといったスポーツ文化をつくりあ げてきたのだった。そして、ワーズワースや くねくねと曲がりくねった小道の向こうに続 プロンテ姉妹などの文学、ターナーをはじめ とする風景画なども、すべてこの豊かな田園 生活の中から生まれたのだ。

> こうしたコッツウォルズの田園地帯に、多く の建築家・工芸家たちがユートピアを求めて やってくることになる。19世紀後半のことで



上:このマナーハウスは14世紀につく

下:美しい自然が残るコッツウォルズ 地方。この木は落雷にあったのだろうか





omestic Revival

住宅復興と建築家たち

産業革命が急速に進行するなかで台頭してきた中流階級。 19世紀後半の住宅復興は、こうした中流階級のための住宅プランを どのようなものにすべきかという課題でもあった。 そのときにクローズアップされたのが、田園の民家建築である。 ヴァナキュラー(その土地に根ざした)な住宅の要素を取り入れつつ、 建築家たちは中流住宅の原型をつくっていったのである。



田園をめざした建築家たち…。その口火を切ったのは、アーツ・アンド・クラフト運動で知られる工芸家ウィリアム・モリスである。 1871年、モリスはオックスフォードの西部、ケルムスコット村にあるマナーハウスを借りて移り住んだ。産業革命の進展で、ロンドンのまちが煤煙とスラムに覆われつつあった時期のことである。

ユートピア的社会主義者ラスキンに深く傾倒していたモリスにとって、機械生産によって失われる手仕事、労働の喜びを取り戻すことが理想の生活の第一歩であり、そのために中世の「誠実で単純な生活」を見直す必要があったのである。ケルムスコット村に点在する小さな民家や小屋。無名の大工の手仕事によってつくられた、気取りのない簡素な住宅。こうした田舎のヴァナキュラーな建物にモリスが惹かれていったのも当然のことかもしれない。モリスは言う。「簡潔性と頑丈さが建築のまさに第一要件である」と。

続いて、モリスの弟子であった建築家・工芸家アーネスト・W・ジムソンが、その友人のアーネスト&シドニー・バーズレイ兄弟が、さらにチャールズ・R・アシュビーが、次々にコッツウォルズへ移り住んだ。彼らは決して田舎に隠遁しようと思ったわけではない。理想とする住宅の原型、そのスピリットを求めてやってきたのだ。

ちょうどこの時期、イギリスでは未曾有の住宅建設ラッシュが始まっていた。産業革命によって生まれた中流階級のための住宅、それも彼らが夢見た郊外の一戸建住宅が大量に必要とされていたのである。住宅復興=ドメスティック・リバイバルと呼ばれるこの動きは、中流階級のライフスタイルに応じた住宅プラ

ンの模索でもあったのだ。

そこに大きなヒントを与えたのが、モリス以降、時代の底流に流れていた田舎の中世住宅の見直しである。ヴァナキュラーな住宅を引用、折衷しながら、多くの建築家たちが中流住宅の基本プランをつくっていくことになる。民家が現在の住宅の原型となっていったのだ。

モリスを源流とする中世主義、民家至上主義ともいうべきものは、その後の建築家たちにも脈脈と受け継がれることになる。たとえば、今世紀初頭、ロンドン郊外に建設された広大な田園都市「ハムステッド・ガーデン・サバーブ」の計画を立案したレイモンド・アンウィンもその一人である。そして、この「ハムステッド・ガーデン・サバーブ」をモデルに、日本の田園調布や成城学園といった郊外住宅地がつくられたのである。

はるかイギリスの田園住宅の伝統が日本にも 移入されたという事実。それにしても、と思 う。同じ流れを汲みながら、なぜこんなにも 違ってしまったのかと…。その解は案外、単 純なことなのかもしれない。

コッツウォルズの小道には、道ばたの一軒に わが家のような愛着を感じる、そんなやわら かな時が流れていた。やわらかな空間に建つ、 やわらかな住宅。誰でもがここに佇めば、住 宅とは何かという問いに対する答えを、容易 に感知できるはずである。ワーズワースは、す でに200年前にこう謳っている。

かなたの小屋は幸福の四阿のように見え/そ こに巣ごもる優しき思想/純潔な愛情の雛た ちを/守らんための隠れ家のよう





上:裏庭の花壇。自然を愛する人々の暮らしが垣間見える 下二点共:コッツウォルズ産の石材が土台な どに使われている

前頁:コッツウォルズの石づくりの民家

Nomestic Revival

参考文献: Anthony Quiney *The Traditional Buildings of England* Thames and Hudson Ltd, London 1990

Richard Sale *The Visitor's Guide to The Cotswolds* Moorland Publishing Co Ltd. 1989 『イングランドの民家』R.W.ブランスキル、片野博訳 井上書院 1990

『イギリスの郊外住宅』片木篤 住まいの図書館出 版局 1987

『建築逍遥』長谷川堯 平凡社 1990

上: 石づくりの民家が並ぶコッツウォルズの村落下: コッツウォルズの丘陵地帯。冬でも枯れることのない青々とした牧場や芝が広がっている中二点共: 古い民家がよく手入れされて、いまだに住宅として使われている



ストラトフォード・アポン・エイヴォン

ミュージアム・ガイド

シェイクスピアはここストラトフォード・アポン・エイヴォンで生まれ、ロンドンで劇作家として大成したのち、再びここで晩年を過ごした。ストラトフォードにはシェイクスピアにゆかりのある建物が多く残されており、それらがすべてミュージアムや資料館として公開されている。こうした家々を2階建てのバスで巡るツアーがあって、バスは30分ごとに巡回している。とりあえず、そのコース順に紹介しよう。

シェイクスピアの生家 Shakespeare's Birthplaceは、生誕400年を記念して建てられたシェイクスピア・センターの隣にあり、シェイクスピアが産声をあげた2階の部屋には、ゆりかごが復元されている。



シェイクスピアの生家

シェイクスピアの妻アンが結婚前まで住ん でいたという草葺きの農家が、アン・ハサ ウェイの家 Anne Hathaway's Cottage。



アン・ハサウェイの寡

台所にはかまどや暖炉などが残っていて、 当時の暮らしがよくわかる。

つぎはシェイクスピアの母の生家、メアリー・アーデンの家 Mary Arden's House。テューダー朝様式の大きくて立派な農家で、室内の家具や調度品、荷馬車や農具のほかに、木工所、鍛冶場、革細工の工房など、カントリーライフそのままの施設が保存・復元されている。





上:メアリーアーデンの家 下:メアリーアーデンの家。 当時の農具なども残されている。

ホールズ・クロフトHall's Croftは、シェイクスピアの娘スザンナとその夫で医師のジョン・ホールが住んでいた住宅。ホールが使っていた診療室とそこに展示された医療器具が見もの。



ホールズ・クロフトの室内

最後にナッシュの家とニュープレイス Nash's House & New Place。シェイクスピアが 晩年を過ごした豪邸がニュープレイスで、現 在は庭園と、隣接するナッシュの家が残さ れている。



上:シェイクスピアが晩年を過ごした邸宅の庭園 下:ナッシュの家の室内

開館時間

シェイクスピアの生家

3月~10月:月~土曜日9:00~17:30/日曜10:00~ 17:30 11月~2月:月~土曜日9:30~16:00/日曜 10:30~16:00

アン・ハサウェイの家

3月~10月:月~土曜日9:00~17:30/日曜10:00~17:30 11月~2月:月~土曜日9:30~16:00/日曜10:30~16:00

メアリー・アーデンの家

3月~10月:月~土曜日9:30~17:00/日曜10:30~17:00 11月~2月:月~土曜日10:00~16:00/日曜13:30~16:00

ホールズ・クロフト

3月~10月:月~土曜日9:30~17:00/日曜10:30~17:00 11月~2月:月~土曜日10:00~16:00/日曜13:30~16:00

ナッシュの家とニュープレイス

3月~10月:月~土曜日9:30~17:00/日曜10:30~17:00 11月~2月:月~土曜日10:00~16:00/日曜13:30~16:00

料金:5カ所共通入場券6ポンド(約1080円) ※1ポンド=180円で計算

ストラトフォード・アポン・エイヴォンの

都市と建築を知るキーワード

■ヨーロッパの木造建築

■ハーフティンバー

析の上に、太い柱だけでなく、壁と一体となった間柱や筋かいをのせていくハーフティンバーの壁のつくり方は、フランスではコンストラクシオン・ア・コロンバージュ、ドイツではファッハ・ヴェルクと呼ばれている。この構法では、壁全体が上部の重みを支えるようになっているため、窓などの開口部を大きくすることが難しかった。ストラトフォード周辺に残されている中世〜近世のハーフティンバーの建物を見ると、確



木組の模様が美しいハーフティンバー

かに窓はかなり小さい。柱や桁には堅牢な 樫や楡などの木材が使われ、柱のあいだに は石材やれんが、土壁などが埋め込まれた。 このハーフティンバーの構法は、現在のパ ネル構造へと発展していく。



■ウィリアム・ワーズワース

イギリスの詩人(1770~1850)。19世紀初頭、イギリス詩壇の主流となりつつあったロマン主義の口火を切り、コールリッジとともにその第一人者といわれている。イギリス各地やスコットランドを頻繁に旅行し、豊かな自然と人生との内面的交感を謳って、田園文化へと結晶させた。イギリス北部の湖水地方に住んだことから、湖畔詩人とも呼ばれている。

■カントリーハウス

貴族が自分の領地内に構えていた邸宅のこと。 当時の貴族は、地方にある領地と、宮廷の あるロンドンとのあいだを半年ずつ往復し て生活していた。そのために、2つの邸宅 を区別する必要から、領地内の邸宅をカン トリーハウス、ロンドンの邸宅をタウンハ ウスと呼んだ。現在では、田舎にある住宅 やコテッジのことをカントリーハウスと呼 ぶこともある。

■コッツウォルズ・ストーン

コッツウォルズで産出される石。石灰質の 岩石だが、水の浸食を受けやすいタイプの ものではなく、別名魚卵岩ともいわれる堅 牢な石灰石。やわらかいのでノコギリで容 易に切ることができ、空気にさらしておく と堅くなるという特質をもっている。建築 用石材にはうってつけで、中世の時代には コッツウォルズ地方のみならず、イギリス 各地の建築物に利用された。建物の基礎や 壁だけではなく、薄く切って屋根の材料と しても使われており、厳寒時の霜が石の気 泡の中で凍って、防水の役目もはたしたの だという。



コッツウォルズの石と、石づくりの民家

■ウィリアム・モリス

イギリスの詩人・工芸家・思想家 (1834~1896)。ラスキンの影響を受けて中世に憧れ、産業革命のもたらした芸術の機械化に反発して、誠実な手仕事が重要であることを説いた。1871年、ケルムスコット村に移り住んで、工芸・書籍デザインなど幅広い分野で活躍した。モリスのために親友フィリップ・ウェッブが建てた赤いれんがの「レッドハウス (赤い家)」は、伝統的なイギリス民家のスタイルをもつもの。

モリスが中心となったアーツ・アンド・クラフツ運動は、アール・ヌーヴォーの成立にも影響するなど、画期的なものではあったが、手仕事を尊重して機械生産を否定したために、歴史主義あるいは時代錯誤という評価をも与えられることになる。

■出し桁

ハーフティンバーの建物をよく見てみると、2階の部分が1階よりもせり出しているものが多い。現在の感覚からすれば非常に不安定に見えるこのスタイルは、「出し桁」とか「桁出し」「はみ出し構法」といわれるものだ。狭い市内では建設工事の際に短い材



2階の部分がせり出した「出し桁」。約30センチほど張り出してい

木しか使えなかったかららしい。当時の大 工技術では、このように2階部分を張り出 させるのは難しく、お金のかかる構法だっ た。出し桁を施した建物は、当時は富の象 徴でもあったのだ。

■ナショナル・トラスト

イギリスに多くの自然が、また歴史的な建造物がきちんと残されているのは、ナショナル・トラストという財団があるからだと言っても過言ではない。1894年オクタビア・ヒルによって創立されたこの組織は、翌年

国王の勅令によって公的な自然保護・建築物保存の団体として運動を開始した。じつはナショナル・トラストが発足するよりも早い時期、1877年に、ウィリアム・モリスは古建築保存協会を結成して古い建築物の保存に力を入れており、ナショナル・トラストもこうしたモリスらの流れを汲んでいるといっていいだろう。

■草葺き、石瓦

屋根は補修の際に葺き替えられることが多いが、それでもまだここストラトフォード近辺には、さまざまなタイプの屋根が残っていて、屋根だけを観察して歩いても楽しい。とくに、日本ではもう見かけなくなった草葺きの民家も多く、現在でもイギリスには約5万戸が残されているという。材料はかや、あし、わら、ヒース科の植物などで、棟の部分には、はしばみの小枝などで、装飾パターンが施されていたりする。また粘土を焼いた平瓦や、コッツウォルズの石などを使った石瓦は、小さな穴をあけて、屋





草葺きの屋根。棟に装飾が施されている

根に渡した木材の釘や金具に吊り下げられていたことが、小屋などを観察するとよくわかる。

■オールド・イングリッシュ様式と クイーン・アン様式

19世紀後半にはじまった住宅復興=ドメス ティック・リバイバルによって、田舎に残 る民家や農家が見直され、それが中流住宅 に引用されていったが、そこから新しい建 築様式をつくりだしていったのが、建築家 リチャード・ノーマン・ショウである。彼は、 ヴァナキュラーな田舎の住宅を基本にしな がら、そのモチーフを自由に組み合わせて、 オールド・イングリッシュ様式と呼ばれる スタイルをつくりあげた。その名のとおり、 古きよき伝統的なイギリスを思わせる様式 で、田舎の大邸宅にこうしたデザインを採 用していった。一方、都市近郊の中小住宅 には、やはりさまざまな要素を折衷させた、 赤れんがづくりのクイーン・アン様式を考 案した。

このように、リチャード・ノーマン・ショウが自由闊達に折衷させていったのに対して、ウィリアム・モリスのよき理解者であったフィリップ・ウェッブは、美しい農家の構成をそのまま再現しようとした。ヴァナキュラーなものへの視線が好対照である。